第26話

朝をひらく

予期せぬ結論 面白く

レットイットビー

永田 円了
真国寺住職

会議は疲れる。どうして分かってもらえないのか、自分はみんなのためになることを言っているのに、とイライラが鉛のように身体の中に残る。人は何かを心から正しいと感じたとき、自分に反対する相手を説得しようとせずにはいられなくなるもののようである。

「コトバの意味が通じないのは何ででしょうかね」。先日、自坊での2人ミーティングでポロリと出た発言。経営する施設スタッフとの会議でのいら立ちをY氏は語った。いつも冷静で温和な彼がそういうからには、よほどイライラしたにちがいない。

このコトバをきっかけに、2人の話は深まった。話をしてもある人とはとても疲れ、またある人とは、何時間話をしても疲れない。いやむしろエネルギーが充満してくる。この違いはどこからくるのだろうか。

話していて疲れさせる人の共通点は、たえず話を支配しようとすることである。「チーズケーキがおいしい店を知ってるよ」というと、「私、もっとおいしい店、知ってるよ」と答える。自分がいつも話の中心にいなければ気がすまないのである。話のキャッチボールがうまくできず、会話はぎくしゃくする。また、いかにも人のために主張しているようでも、その人の個人的な野心や下心が見え隠れする会話、これも疲れる。

それでは疲れないコミュニケーションはないのか。いやある。それは、会話を支配しようとする気持ち、相手を説得したい、自分が優位に立ちたい、と思う私欲を廃することである。

ダイアログと名づけられるこの創造的会話形態は、議論に勝つことや、真実という名のもとに、雄弁に持論を述べることも必要としない。目指すは、それぞれの意見を目の前のコップの中に入れ、それをよく見ること。そこには比べることも、評価されることも必要とされない時空があるだけ。

たわいもない話題から出発しても、その話の芽はどんどん進展し変化をし、終わりには思いもしなかったような結論に達する。それはあたかも私たちの人生シナリオのように、これから何が起こるか誰も正確な予測はできないもの。だから面白く、ワクワクするのである。

会議では、評価、説得力、判断が場を仕切る。一方ダイアログでは、空っぽの器とエネルギーが充満するレットイットビー（あるがままに）の世界が展開する。